



文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(連携型)」

清流の国 輝くギフジョ 支援プロジェクト 通信

No.3
2016 SEPTEMBER

Event News

10月

4日(火) **岐阜大** キャリアパス支援講演会
「居場所」のない男と「時間」がない女
 ~女性(研究者)が仕事を続けていくうえで、現代社会にどのような問題があるのか~
 時間: 17:30~19:00 場所: 岐阜大学サテライトキャンパス 多目的講義室(大)
 講師: 水無田 気流氏(詩人・社会学者/國學院大學 教授)

14日(金) **岐阜大** ロールモデル講演会
女性研究者・医療専門職としてしなやかに生きる
 ~ワーク&ライフイベントのバランスの取り方~
 時間: 14:40~16:10 場所: 岐阜薬科大学本部 第二講義室
 講師: 錦織 淳美氏(岡山大学病院 薬剤部)

27日(木) **岐阜大** **トップマネジメントセミナー**
 時間: 13:00~14:00
 場所: グランヴェール岐阜
 講師: 早川 信夫氏(NHK解説員)

11月

10日(木) **岐阜大** フォーラム
『女性が輝く岐阜』に向けての女子大学の役割:
女性研究者が『地方』で研究を続けるには — 取材で出会った人々
 時間: 未定 場所: 岐阜女子大学
 講師: 箕浦 由美子氏(岐阜新聞 生活文化部長)

11日(金) **岐阜大** **リーダーシップ研修**
 時間: 16:00~17:30 場所: 岐阜薬科大学 大学院講義室
 講師: 島本 啓子氏(公益財団法人 サントリー生命科学財団 生物有機科学研究所)

12日(土) **英語プレゼンテーションセミナー**
 時間: 10:00~16:00
 場所: 岐阜女子大学 文化情報センター 大会議室
 講師: リンクサイエンス社委託

12月

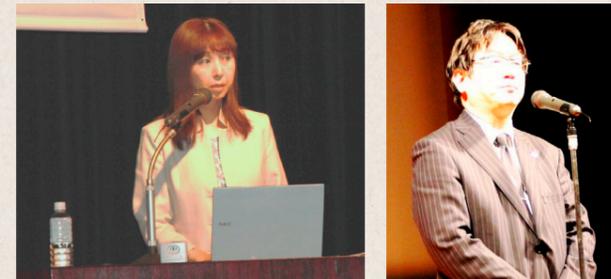
14日(水) **アピ(株)** **トップマネジメントセミナー**
 時間: 未定
 場所: 長良川リサーチセンター3F
 講師: 未定

15日(木) **岐阜大** **リーダーシップ研修**
 時間: 15:00~ 場所: 岐阜女子大学 本館3階 大会議室
 講師: 森田 順子氏(株式会社 岐阜放送 代表取締役社長)

【発行】  岐阜大学  岐阜薬科大学  岐阜女子大学  アピ株式会社

【問い合わせ先】 岐阜大学男女共同参画推進室
 ■TEL: 058-293-3378 ■FAX: 058-293-3396 ■Email: sankaku@gifu-u.ac.jp
 本誌は、「清流の国 輝くギフジョ支援プロジェクト」 URL <https://diversity.gifu-u.ac.jp> ホームページ上で公開しています。

1 シンポジウム 「女性の活躍と地方創生~人を育てる企業・地域を育てる企業~」



サントリーウエルネス株式会社 折井専務取締役 アピ株式会社 野々垣代表取締役社長

7月19日にシンポジウム「女性の活躍と地方創生~人を育てる企業・地域を育てる企業~」が岐阜市内で開催されました。四連携機関中唯一の民間企業という特性を活かして、アピ株式会社が中心となり企画を進め、企業におけるダイバーシティ推進を大学や自治体といかに共同して進めるかを議論する場となりました。

基調講演では、講師にサントリーウエルネス株式会社の折井雅子専務取締役を迎え、サントリー・グループのダイバーシティ環境についてご講演をいただきました。サントリーでは、新鮮な視点の導入という観点からも多様な人材の確保・育成の重要性に注目しており、ダイバーシティ環境整備の部署を設けて女性の活用を推進なさっていますが、女性の活躍を推進していくためには「トップダウンとボトムアップ」および「制度とマインド」という両輪を動かしていく必要があるとのこと。すなわち、上層部の主導だけではなく、働く女性自身からの動きも必要であり、また制度を整えるだけではなく、女性たち自身が更に意欲をもって、WLBの挑戦的な体験をしなければならないということです。会社全体、ひいては社会全体が意識を変革すれば、女性が働きやすい会社は男性にも働きやすい会社であることが認識され、上司もそのメリットを認識できるようになり、そして女性の仕事に対する意欲変革と業務成果の向上にもつながるのです。

次に岐阜県子育て支援エクセレント企業にも認定され、女性の活用を積極的に推進するアピ株式会社での取り組みが、同社、野々垣孝彦代表取締役社長から紹介されまし

た。つづくパネルディスカッションでは、林正子 岐阜大学副学長がモデレーターを務め、折井氏、鈴木裕子氏(岐阜県子ども・女性局長)、原英彰氏(岐阜薬科大学 副学長)、森田順子氏(岐阜放送 代表取締役社長)が意見交換を行いました。折井氏は「働きやすさと働きがいは表裏一体」、女性は制度に甘えることなく、仕事を通して自己成長に努めることが大切であると述べ、鈴木氏は高校教師としての経験から、高校・大学生のうちからライフデザインの指導をするなど、意識改革と環境整備をさらに推進し、「育児に優しい岐阜を実現する」ことで、地方創生に繋がりたいとの考えを語られました。原氏は男性中心の企業文化を変える難しさと、それでも女性の活用なしにこれからの日本経済は立ちゆかない現状に触れ、「何のためのダイバーシティか、何を換えなければいけないのかを繰り返し発信していくことが必要だ」と論じ、森田氏は仕事をする上では真剣な覚悟も必要である、近年の女性は優秀な人材が多く、経営者としては大歓迎であると述べ、「例えば、育休後復帰してから元のポジションに戻れるのかという質問をよく受けるが、それはその時々で異なる。ネガティブな面にとらわれず、自分のやりたいことを実現するベストな方法を、その時々で判断することが必要」と語られました。

会場には岐阜県内の企業からの参加者を中心に、およそ380人の聴衆が集まり、「大企業でも、地方の中堅・中小企業でも、ダイバーシティの重要性は同じだと思った」、「これまで今後のキャリアプランをじっくりと考えたことがなかった。女性の意識やキャリアへの考え方を考える必要性を実感した(大学職員・女性)」などの感想が寄せられ、充実したシンポジウムとなりました。



2 平成27年度 連携型共同研究成果紹介

平成27年度連携型共同研究に採択された研究代表者のお2人にお話を伺いました。

「生きづらさ学」の構築に向けた領域横断型実践研究の試み

研究代表者 小山 真紀 岐阜大学 流域圏科学研究センター 准教授

共同研究者

大崎 友記子(岐阜女子大学 家政学部生活科学科住居学専攻・准教授)・船越 高樹(岐阜大学 障害学生支援室・特任助教)・相原 征代(岐阜大学 男女共同参画推進室・特任助教)

研究の目的

本研究は、「生きづらさ」の視点から、縦割りの価値観を超えて多様な分野から切り込むことで、本質的な問題構造を明らかにし、対処療法を超えた解決策に資することを旨とするものであるが、この実現には数年以上の時間を要すると思われたため、本助成期間ではこの問題に取り組むための基本的な研究体制と手法の構築を目的とした。



ワークショップの様子

◆どのような結論が得られましたか？

本研究期間では、共同研究者それぞれの分野における生きづらさ研究と、それを横断的につなぐワークショップを開催しました。これらを通じ、各分野における生きづらさの個別課題について明らかにしたことに加え、ワークショップを通じて、どんな問題でも、問題を扱うためには共通するモノサシが必要であること、また一方で、モノサシができるとモノサシで測れないものが放置される危険性などが明らかにされ、生きづらさ学のためのモノサシのあり方の基礎的知見を得ることができました。

◆なぜこの課題を選ばれたのですか？以前から専門的に研究されていたテーマだったのでしょうか？

「生きづらさ学」なる学問は本研究を通じて提唱されているものであり、しかもまだ「学」を目指している段階です。そのため、共同研究者の誰もが本研究を専門としているわけではありません。しかしながら、共同研究者の全てがそれぞれの学問分野の中で、既存の枠組みからこぼれ落ちる人、うまく取り扱えない問題として、「生きづらさ」の問題を認識していました。近年特に「生きづらさ」をキーワードとした書籍や言論が増加しているように、生きづらさの問題は人・社会の質を大きく低下させたり、あるいは生命の危険を引き起こしたりするよう、大きな問題となってきています。そして、それはこれまでそれぞれの人の問題、それぞれの分野の中での問題として個別に扱われていましたが、そういった対処療法ではなく、分野を超えた「生きづらさ学」として考えたいと思いました。

◆他大学・他分野の研究者との交流で得られたものがありましたか？

他分野・他大学の研究者との交流を通じて、自分分野の研究手法や論理展開が、普遍的なものではなく、ローカルルールにすぎないことを強く認識することになりました。多様な考え方や手法に触れることで、今までとらわれていたローカルルールから自由になり、研究の幅がどんどん広がりつつあると感じています。これによって、対象の見え方がどんどん変わって来ていること(見えている世界の転換)による興奮を感じています。

術後嘔気嘔吐 (PONV) におけるオピオイド鎮痛薬の関与に関する研究

—薬物血中濃度測定と遺伝子多型解析を用いた要因解析—

研究代表者 曾田 翠 岐阜薬科大学 薬物動態学研究室 助教

共同研究者

杉山 陽子(岐阜大学 大学院医学系研究科 麻酔・疼痛制御学 講師)

研究の目的

術後嘔気嘔吐 (PONV) は、術後患者の3分の1が経験する頻度の高い愁訴であり、経口摂取開始の遅延により術後の回復を妨げ、入院期間の延長や患者QOLの悪化をもたらす。そのためPONVの発症予防は医学的・医療経済学的側面から極めて重要である。しかしながら、PONVの危険因子や発症要因について完全には解明されていない。そこで本研究では、①オピオイド鎮痛薬の血中濃度、μ受容体などの薬効関連遺伝子とCYPなどの薬物動態関連遺伝子の多型、既知の危険因子を包括的に解析し、②PONV発症の予測精度の向上に寄与する要因を見出すことを試みた。さらに、見出した要因に基づき、PONV発症予防策を考案し、より安全な患者治療法の提言を行うことを最終目的とした。

◆どのような結論が得られましたか？

オピオイド鎮痛薬の血漿中濃度と、代謝酵素CYP3A4およびCYP3A5、トランスポーターMDR1などの薬物動態関連遺伝子の多型との関連はみられませんでした。43%の患者がPONVを発症し、これまでの報告と同様に、女性や非喫煙者においてPONV発症率が高いことが確認されました。さらに今回の検討では、術前のオピオイド鎮痛薬投与による浮遊感・眠気などの自覚症状を有する患者は高い確率でPONVを発症することが明らかとなりました。臨床現場でPONV発症リスク管理に用いられている Apfel スコアに、今回見出した術前オピオイド鎮痛薬投与による自覚症状の有無を追加してPONV発症を予測したところ、より正確にPONVの発症・非発症を予測できることが示されました。現在さらに解析を進めて、PONV発症の予測精度の向上に寄与する因子の特定を目指しています。

◆なぜこの課題を選ばれたのですか？以前から専門的に研究されていたテーマだったのでしょうか？

これまで主に、薬物の血中濃度、薬物動態関連遺伝子の多型、臨床評価の関係について薬剤部や診療科と連携して研究をしてきました。共同研究者の杉山先生から、PONVに関する臨床カルクエスションについて話を伺った際、PONV発症の予測精度の向上に寄与する要因の解析はより安全な患者治療に貢献できることであり、その要因解析は測定系確立や遺伝子多型解析などの自身の技術を活かせる題材であると感じ、杉山先生との共同研究の実施を決めました。

◆これ以前にも既にPIのご経験はありましたか？また、今回の研究でPI経験を積んだことにより研究者として一層成長されたという実感がありますか？

これまでの共同研究では分担者の経験のみで今回初めて自身が主となり共同研究する機会をいただきました。共同研究遂行にあたっては共同研究者の杉山先生だけでなく周りの研究者の先生方にもご支援・ご指導いただき、PIとして必要とされるスキルやノウハウを学ぶことができました。今回得た経験は今後の研究活動に対する意識を向上するための素晴らしい転機となりました。

3 平成28年7月～9月の主な活動

7/2

若手女性研究者の研究力向上支援のための 科学英語論文執筆セミナー 「効果的な英語論文の書き方」 第2回

岐阜大学サテライトキャンパスにおいて、「効果的な英語論文の書き方」の第2回を開催しました。22名の方々に受講していただきました。



7/28

平成27年度採択 連携型共同研究成果報告会

岐阜大学全学共通教育棟1階 アクティブ・ラーニング教室を会場として、「平成27年度採択 連携型共同研究成果報告会」を開催いたしました。67名の参加を得て、12の研究課題に関する口頭とスライドによる報告がありました。

また、会場内では研究成果を紹介するポスターも掲示され、会の終わりには、連携機関の代表者から講評をしていただきました。



8/1~10

夏期休暇期間学童保育トライアル



連携機関所属の女性研究者の子どもを対象とする学童保育トライアルを実施しました。長い夏休み中、子どもたちの預け先で悩まれるお母さん・お父さん研究者からの要望に応えるべく、子どもたちはお休みですが、大学では試験期間中で教員たちは休めない8月上旬の時期を選んでの試行となりました。参加児童は合計10人、「美術講座」、「イタリア語講座」、「収穫体験」など遊びと学びのバランスの取れた内容を心がけました。時には友達とケンカしたり、先生にしかられたりしながらも、子どもたちは心から楽しんでくれたようです。

8/29~30

2日間集中 英語プレゼンテーションセミナー

岐阜大学内で2日間(9:00~17:00)にわたり、英語での学会発表等に備えるセミナーを開催しました。

受講者5名の少人数制。最初に各自準備してきた短いプレゼンを実施し、その内容に関する意見を交換。2日目に改良されたプレゼンを再度実施するという形式で、個々のレベルに合わせて学習できたと好評でした。



9/8

岐女大 研究倫理研修会



岐阜女子大学において研究倫理研修会「研究費の不正使用、研究活動の不正行為の防止について」が開催され、65名が参加しました。講師の児島 明佳氏(日本学術振興会 研究事業部研究事業課長(兼)研究倫理推進室長)から、最近の動向、eL CoRE(e-Learning Course on Research Ethics)、今後の取り組み予定等について、わかりやすくご説明いただきました。

特に、研究不正行為については、具体的な事例を用いて、講師から参加者へ問いかけをする形で進められ、より身近な問題として考えることができました。

9/21

岐薬大 リーダーシップ研修

「今こそ女性研究者活躍のとき—リン脂質代謝研究を通して医療に貢献する」



活発な討論がなされました。

深見氏は研究者としては異色の経歴で、大学卒業後慶応大学病院に就職—結婚退職後しばらく子育てに専念—臨床薬剤師を目指して公務員に応募するも東京都老人医療センター研究所に再就職—東京大学医学研究所に移る—博士号取得—東京薬科大学に教授として迎えられる—というように、もとは臨床薬剤師志望でありながら、再就職の配属先が研究所であったことがきっかけで転向し、ほどなくして研究に目覚め、めざましい業績をあげて、研究室を主宰するに到っています。教授になった時には、好きなだけ実験をして、成果さえ出せばよかったそれまでの環境から、学生育成に責任を持ち、組織を動かす能力を求められるようになったことで、重圧を感じたそうですが、今や学科長や国の機関の委員などの重責もこなすトップリーダーです。二児の母として家庭を守りながら、責任者として研究を先導し、優れた成果を出し続ける秘訣として、研究は長・短距離走の合わせ技であり、重要な局面を察知する能力と、その局面でがむしゃらに走れるどうかにかかっているという経験に基づいたアドバイスをいただきました。